

宝の海から

白浜で出会った珍しい生物

32

京都大学助教授 久保田 信(京都大学 瀬戸臨海実験所)

瀬戸内海からの便り

【香川県坂出港の「豊潮丸」にて】船酔いに悩む女性研究者3人(木村まさ子、香田唯、花岡哲子)らを中心とした「瀬戸内ペンント」日に行った瀬戸内海の生物調査は快進だった。



薄い貝殻をもったシズクガイは貧酸素海底の指標種



4対の羽のような突起を前部に備えるヨツバナスズクガイA型は、貧酸素環境の海底にすむ「カイ類」

「羽根」生えた「ゴカイ」が珍らしい

調査を結成、大阪湾の湾有機物によって水が汚れ奥部を集中的に調べた。そこで、ひたひたなと海底はヘドロ状態で、定量的な状態をつくり出す量採集用の採泥器を使っやっかいなヤツだ。同種で水深10mほどの海底の表層数十センチまでかきとった。泥をふるい落とすた。泥をふるい落とすと、ほとんどが生物の果や貝殻などで、生きた生物は少なかった。し、中には白浜のようなきれいな海にハナリ、果穴から2本の「む



瀬戸内海初記録となった珍しいソトエリクラゲ(ヒドロ虫綱、花クラゲ目)＝小林亜玲さん撮影

5センチほどの小型の二枚貝のように吸い込み、えらで富栄養な海底の泥底でこしとって食べている。掃除屋としてたくましく生きている。貝殻は薄く、内臓が透けて見えるほどだ。容器にいれてしばらくすると落ちてきたのか、この航海での著者らが同乗した。

ギンチャク類の果も採取され驚いた。このヘドロの中から有機汚濁指標種である「カイ」の仲間ヨツバナスズクガイA型と、二枚貝のシズクガイが大量に見えられた。有機汚濁は、食べ物のや動物の死がいなどの

アサリでみられるような生物調査の研究目的は、残念ながら、瀬戸内海2本の水管をだして、海水を吸い込んで出して、戸内海産のクラゲ類がまったく捕れなかった。この水管で泥表面基礎的データを取ること、南西諸島ではどこでもこの有機物のくすを掃除機と、ライフワークであるメツリガネクラゲ、カラ

ち状の触手」を伸ばして有機物のくすを集めて食べている。果穴を中心としたきれいな円形で食べの跡を残すので、すぐに存在を知ることができる。体長4センチほどの細長い体に4対の羽根状のものが頭の下に付き、鳥の羽に似た美しい形をしている。それぞれの中心に赤い血管が通る呼吸器官がある。いぼ状の足はなく、歩行はしない。多数の環節のそれぞれから硬い剛毛が針のように飛び出し、この動物門である特徴を示している。シズクガイは殻長1・



ペンントスを定量採集できるスミスマッキンタイヤ型採泥器

「豊潮丸」は6月3日小豆島を通過、四国沿岸に向かった。瀬戸大橋の下も通過する。ここにはイルカもトビウオも現れないが、激しく行き交う大型船舶の姿を見ることがある。ありがたいのは穏やかで船の揺れが極端に少ないことである。夕方方には坂出港に入港し、翌日備後灘での採集などで今回の生物調査航海を終える。